

歴史民俗学研究

第 2 号

-
- 伊勢神宮祠官の信仰形態—仏教禁忌の中の仏教信仰—
数元 彬
- 近世京都における薬種仲間の研究
佐古田あい
- 隋末唐初の僧善慧について
桐原孝見
- 夏王朝伝承の神話の実像
大島啓輔
- 花の御所材木船と山門堅田関—「年余」試論—
矢野義典
- 〈光明皇后湯施行物語〉の研究
—「東大寺縁起絵」に文殊菩薩が描かれた背景—
中島里菜
- 写字台文庫成立の舞台裏
小林健太
- 『江戸願懸重宝記』
神仏
清水真好
- 2016年度彙報
-

龍谷大学民俗研究会

目次

伊勢神宮祠官の信仰形態―仏教禁忌の中の仏教信仰―	数元 彬	1
近世京都における薬種仲間の研究	佐古田あい	16
隋末唐初の僧善慧について	桐原孝見	35
夏王朝伝承の神話の実像	大島啓輔	54
花の御所材木船と山門堅田関―「年余」試論―	矢野義典	74
〈光明皇后湯施行物語〉の研究 ―「東大寺縁起絵」に文殊菩薩が描かれた背景―	中島里菜	87
写字台文庫成立の舞台裏	小林健太	98
『江戸願懸重宝記』 神仏願懸重宝記	清水真好	109
二〇一六年度彙報		119
あとがき	浦西 勉	120

二〇一六年度 彙報

九月二十四日

「地藏看病給事」

担当：吉田俊介 (M2)

十月八日

「薬師之利益事」

担当：谷 洋平 (M1)

十月二十二日

「地藏看病給事」

担当：吉田俊介 (M2)

十一月十二日

「地藏看病給事」

担当：吉田俊介 (M2)

十二月三日

「阿弥陀利益事」

担当：川股寛享 (D4)

二〇一六年
五月二十一日

「仏舎利感得シタル人事 (前半)」

担当：小林健太 (研究生)

六月十一日

「仏舎利感得シタル人事 (前半)」

担当：小林健太 (研究生)

七月九日

「仏舎利感得シタル人事 (後半)」

担当：佐古田あい (M2)

九月六日

「薬師之利益事」

担当：谷 洋平 (M1)

二〇一七年
一月十四日

「薬師観音利益の事 (前半)」

担当：中島里菜 (M1)

二月四日

「薬師観音利益の事 (前半)」

担当：中島里菜 (M1)

三月二十七日

「薬師観音利益の事 (後半)」

担当：数元 彬 (特別専攻生)

あとがき

龍谷大学民俗研究会の勉強会の過程で「歴史民俗学研究」二号が刊行できた。この表題は単に歴史学と民俗学を結びつけたのではない。民俗学の視点は何よりも「地域」にアクセントを置く。そして、仏教史を研究しようとする場合、地域に住む人びとが長い期間にわたり、伝承してきている社会的文化的現象である宗教伝承（民俗）に注意して研究する態度を意識する。「仏教史」が「地域」に住む人びとの立場からの宗教史であったのであろうかと言う疑問も、そこには含まれている。この立場は「地域」に住む人びとの考え方や価値観の認識を無視しては成り立たない。そのためには村落共同体の人びとの具体的な宗教資料によって、事実を復元し、認識することに重要性が認められる。そのような態度を身につけるためには「地域」に向き参加観察が必要であり、それが民俗学の視点でもある。この場合、「地域」の伝承文化とは、①土地の様子、②日常の暮らし、③村落社会のシステム、④信仰、⑤文化の様式、⑥言語生活

であるが、その認識を深める作業から「地域」に住む人びとの考え方や価値観に立って研究する点にある。しかし、はたと立ち止まってしまうことがある。このような視点からその「地域」の文化である「民俗」という伝承様式の歴史的な認識が出来るのであろうか。それは科学としてほとんど不可能な研究に突き当たるのではない。つまり、「地域」の人びとの側からの、もの考え方や価値観による記録が、ほとんど皆無であること。また、残った資料でも「地域」に住む人びとと言うより権力者側のもので、地域の姿が存在していても、その考え方や価値観までが読みとれる資料の不十分さと、その解釈への限界があること。伝承文化の歴史的な実証研究が重要であると言いつつ、やはりこの民俗学の方法だけでは難しいのである。歴史民俗学は資料の残る側の文献の解釈を注意深くし、むしろ残らない部分に視点を持ちながら、研究を模索しなければならない。龍谷大学民俗研究会は、そのような視点を身につけようと勉強している。

（浦西勉）

歴史民俗学研究 第二号

二〇一八年二月二十日 印刷
二〇一八年二月二十日 発行

編集 龍谷大学民俗研究会

発行 龍谷大学民俗研究会

〒六〇〇一八二六八

京都市下京区七条通大宮東入

大工町一二五一一

龍谷大学（浦西研究室）

印刷所 株式会社 自照社出版